

日本に急須が入ってきたのは室町時代で、明との**勘合貿易**の輸入品の一つでした。**茶壺(チャフー)**と呼ばれた中国の急須は、「足利家伝来茶瓶四十三品図録」で残すほど珍重されました。この後急須が日本の歴史に出てくるのは、売茶翁、青木木米です。日本各地の陶工は中国式の後手の急須に憧れました。作ってみたいと色々挑戦しましたが、物自体とても高価な物なので多分絵でしか見ていないと思われます。これが幸いして色々な技法を作り出していったと考えられます。**たたら**から作っていくとは思いつきませんでした。これらの茶壺は皆後手でした。日本ではなぜか横手で作ることが多かったです。江戸末期の陶工青木木米は、後手と横手の物を残しています。



中国で一番古いと言われている茶壺のレプリカ

万古焼も明治初め、国内向けと共に貿易品として茶器を作っていました。万古焼には後手の物はあまり見かけません。白土で型物が多く作られました。下の象も弦付きの土瓶です。ただその後この白土が枯渇してきたので、従来のもので作ることができなくなる恐れがでてきました。陶土原料としてあったのは今の紫土しかありませんでした。そこでこの土でできる物を周辺の陶器産地から探そうと、常滑、伊賀、信楽等々から集めました。その時決まったのが**岐阜県大垣市の温故焼**です。地元犬山の金生山の赤土と勝山の白土を混合して造った銀色に輝く急須でした。(江戸時代後期から)

左現在の物
右明代作家
惠孟臣作



白土粘土万古焼



温故焼 松皮細字彫
清水平七(系)落款
温故丸印 石仙温故
の弟 雄介が使った印



まがい物



石仙の落款



温故焼と日本で初めての知的財産問題 (故3代石仙*金堂氏と小西友仙氏から聞いた話も参考にしています)

清水平七の弟勇助と共に作っていた茶器に共感して、大垣藩の家老小原鉄心が「温故焼」と命名して幕臣に推挙しました。明治時代には、明治天皇やその他の重鎮に勧めた。温故の葉には、**明治天皇**からお買い上げいただいたと書いてあります。さらに新政府の後援のもとに**1878年パリ万国、続くシカゴ万国に出品**して名誉大賞を受賞しました。日本最初のブランド品になったので、温故の名前を使った偽物が出まわるようになりました。温故焼は、今では**幻の焼き物**になっています。現在は、継承する人がいなくなりました。

万古焼の職人ではこの温故の製法を使うには大きな障害がありました。**轆轤成型だったからです。**

昔の万古焼茶器は、型作りが多く轆轤を使える職人がいなかったので職人達は**大垣の赤坂へ修行**に行きました。た。四日市では、温故で轆轤を習ってきた職人を**温故師**と呼び、轆轤の事も温故とよばれていました。

温故(平七)が政府に偽物の件を訴えたと思われる。皇室や国家の重鎮の愛用品だったので政府も迅速に動き四日市の商社や職人が警察に一斉に呼び出された。もう一つには、温故は落款の管理にはうるさかった。**温故師**の大雅が同じ鶴に囲まれた落款を使うことを心良く思っていなかったのではないかとと思われる。



四日市大雅の急須